

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1) 骨粗鬆症の予防的戦略構築のための探索的研究</p> <p>女性の骨密度は、約20歳において最大値が得られ、若年期により高い骨密度を得ることは骨粗鬆症の発症防止に重要とされている。高い骨密度を獲得するためには、適量の運動や必要な栄養素の適量摂取が必要であるとされているが、その関与の程度は明確には示されていない。そこで、若年日本人女性における各種栄養素の摂取量および身体活動量と骨密度を横断的に調査し、これらのライフスタイルと骨密度獲得の関与を検討する。このため構築した約1,000名の河田町コホートのデータ集積から、BMIを19以上に保ち、33METsの身体的活動量を有し、ビタミンD摂取400IU/日以上が高骨密度を獲得することが判明している。なお、中学校時のハイインパクトなクラブ活動による運動が重要であることも併せて判明している。</p>	松井教授 橋本准教授	1
<p>(2) 子宮および卵巣由来細胞による細胞シートを用いた新規治療法の開発</p> <p>昨今、再生医療分野の進歩は目覚ましく、さまざまな研究がなされている。その中で、欠損した部位に細胞をdeliveryする方法として組織工学が発展しており、本学TWInsで開発された細胞シート工学は組織工学分野のトップランナーである。細胞シート工学は細胞をシート上に回収して移植に用いることができる技術であり臨床応用も進んでいる。産婦人科分野における再生医療の研究はES細胞研究を除けば世界的にまだまだ行われていないのが現状である。本研究は細胞シート工学を用いて子宮内膜欠損によるAsherman症候群や円錐切除後子宮頸部、卵巣機能の低下による不妊症などに対しての新規治療の開発を目的とする。子宮細胞シートや卵巣細胞シートを作製し、モデル動物に移植実験を行うことでその移植効果を評価し基礎的データを集積する。その後、最終的に臨床応用を目指す。</p>	松井教授	1
<p>(3) 子宮内膜液状化検体細胞診による子宮体癌検診の実用化に向けた基礎研究</p> <p>本研究では検体の適不適の評価がない古典的なクラス分類や陽性、擬陽性、陰性の分類による内膜細胞診の結果報告を廃し、多施設間で細胞診の感度・特異度の算出が可能な精度管理に適した記述式内膜細胞診報告様式を開発し使用することにより、当院の内膜細胞診の診断精度の現状を確定する。その上で、診断基準を統一して、前向き試験が可能な体制を構築する。液状化検体細胞診（LBC）の導入により、施設間精度の差が著しいと予測される内膜細胞診において、診断基準の標準化を推進し、診断精度向上につなげる。子宮内膜液状化検体細胞診が増加傾向にある子宮体癌に対する本格的なスクリーニング法として有用であることの科学的根拠を初めて提供する。</p>	松井教授 秋澤准講師	1
<p>(4) 常位胎盤早期剥離の出生前診断に向けた胎盤組織のマイクロアレイ・SNP解析の応用</p> <p>常位胎盤早期剥離は、遺伝学的要因と環境要因の双方が共同して発症に関わることが知られている。臨床的に本症は、周産期死亡の主要な原因を占め、母児ともに重篤な状態を来すことから、周産期医学上の解決すべき喫緊の課題の一つである。疫学的な検討により本症は、早期に診断し早期の介入を行う事で、児のintact survivalが得られることが判明している。したがって、リスク因子を有する患者を適切な管理下に置き、早期介入を図ることが得策である。本研究は、本症発症のリスク因子を、遺伝学およびエピジェネティック因子にもとめ明らかにしようとするものである。以上により、環境および遺伝・エピジェネティック要因の複数の危険因子から本症の発症の予知に応用する事が最終的な研究目的である。</p>	小川准教授	1